

教会の中央にある大きなステンドグラスから月明かりが差し込み、祭壇の上のキャンドルの炎が揺れている。

夜の静寂の中、シスターであるサシャは教会で深く一人祈りをささげていた。

寂れた村にあるこの教会は老神父と彼女だけで切り盛りしている。本来であれば、夜の祈りを行うこの場に神父もいるのだが、彼は教会本部からの招集で数日この村を離れていた。

「今日も平和ですね」

微笑みながら彼女はつぶやいた。この村は平和だ。多少の諍いはあれど、皆がみな、家族のように仲の良い村なのだ。昨日も近所のジョシユアさんがゲンガさんと殴り合いの喧嘩をしたと聞いたが、最終的にジョッキを飲み交わしていたらしい。その話を聞いた時、サシャは思わず声を上げて笑ってしまった。

さて、この後は夕食を準備しようかしら。そう思い振り返った時、ちょうど教会の扉が開く音が聞こえた。誰だろうと思いつきながらも彼女はそちらへ目を向ける。黒いローブを纏いフードを被っているためはつきりとした容姿はわからないが、背格好からして男性だろう。いくら小柄なサシャでも見上げなければならぬ女性はそうそういない。

「どなたでしようか？」

恐る恐るといった様子でサシヤは声をかける。

「旅をしている者です。少し道に迷ってしましまして……」

そう言つて男は困つたように言うのと、フードを外す。

現れたのは異国の肌を持つ青年だった。歳は二十代半ばほどだろうか。端正な顔立ちをしており、どこか神秘的な雰囲気醸し出している。村では見ない顔にサシヤは少し驚いたがすぐに笑顔を浮かべた。

「まあ！それは災難でしたね。この辺りの道には迷いやすいところがありますものね。それでどちらへ行かれるのですか？」

この村は滅多に外の人は訪れないが、たまにこうして道に迷つた人が尋ねてくることがある。だからサシヤは手慣れた手つきで近くの棚から地図を取り出し、彼に渡した。すると彼は地図を受け取り、しばらく眺めた後に小さく呟いた。

「カンバー溪谷にあるトートの町に」

「トートですか……？たしかこの村の南へ伸びた道を進んでいけば町につけますが……少し前に土砂崩れがあつて今は通れないんです」

サシヤの言葉に彼は困つたように眉を下げると、再び口を開く。

「そうですか……。この辺りで宿泊できるような場所ってありますか？できれば安全そんなところだと嬉しいのですが」

彼の言葉にサシヤは考える素振りを見せると、申し訳なさそうに首を振った。

「すみません、この村には宿がないんです。めったに外の人も来ないので……。もしよろしければ私の家に来てください。狭いところですが泊まるくらいならできますよ」

彼女の提案に彼は一瞬驚いた。こんなにも素早く助けの手を差し伸べてくれる人がいるとは思っていなかった。だが、その驚きはすぐに感謝の気持ちに変わった。

「……ありがとうございます。助かります」

そうと決まれば、客人用に部屋を整えなければならぬ。サシヤは男にその場で待つように言うと、少し駆け足で教会を出て行った。

だからだろう。男の赤い目が鈍く輝いていることに彼女は気づかなかったのだ。

部屋を整えたサシャは教会から少し歩いたところにあつた小さな家に男を案内した。

小さい家ではあるが、綺麗に整えられており手入れも行き届いている。壁には村の写真やクロスが掛けられ、床には手編みのラグが敷かれている。中央のテーブルは木製で、時折の花が飾られている。男は導かれるまま中へ入るよう勧められるがままに椅子へと座つた。

「どうぞ、大したおもてなしはできませんが……」

そう言いながらサシャはテーブルにお茶を出す。そして自分も対面するように座ると、改めて男の顔を見つめた。

「改めまして、私はこの村でシスターをしているサシャと申します。あなたのお名前をお聞きしても？」

「……オレはシンです」

どこか不思議な雰囲気を纏つた彼はそう名乗つた。シンと名乗つた彼にサシャは笑みを浮かべる。

「シンさん……素敵なお名前ですね。この辺りではあまり聞かない響きです」

彼女の言葉にシンは少し居心地が悪そうに肩を竦める。

すると、不意にシンの腹が鳴る音が聞こえた。どうやら彼は夕食を食べていなかったよう

だ。

「ふふ……、すぐにお食事の準備をしますね。と言ってもお口に合うかはわかりませんが……」

「いえ、さすがに食事まで用意してもらおうわけには……」

「いいんです。遠慮なさらないで」

サシヤは立ち上がるとキッチンへと向かった。戸棚からパンを取り出し、スープを温める。そして燻製肉を薄く切り、それをフライパンで軽く炒めた。

その様子を見ながらシンは何とも言えないような表情をしている。しかし、サシヤは気にせず到手際よく料理を作っていた。

数分もしないうちに二人分の食事がテーブルに並ぶ。野菜のたっぷり入った温かいスープに柔らかいパン。質素だが栄養があり空腹を満たすには十分すぎるほどの量だ。シンは少し躊躇った後、スプーンを手に取るとスープを口に運ぶ。

「……美味しいです」

思わず彼はそう口にしていた。その言葉を聞き、サシヤは嬉しそうに微笑む。

「お口に合ったようでした」

そう言つて彼女もまた自分の分を食べ始めた。代わり映えのない食事だったが、久しぶりに人と食卓を囲んだこともあり彼女の心はとても満たされていた。

それから二人はたわいもない話をしながら食事を終えると、片付けを済ませて一息つくことにした。

シンは部屋の中を見渡すと、何かを探しているかのような目をしていた。しばらくの沈黙の後、彼は深いため息をついて口を開いた。

「……お一人で住んでいるのですか？」

彼の言葉にサシヤは頷く。

サシヤの両親はずっと昔に亡くなっていた。それからは教会で神父とともに二人暮らしをしていたのだ。

だからサシヤにとつて家族と呼べるのは神父だけなのだが、その彼も年頃の娘に気を使つてか物置として使われていた小屋を改築して彼女に与えてくれた。だから彼女はこの小さな家に住んでいる。そう伝えるとシンは納得したように頷いた。

「なるほど……それでサシヤさんはここでシスターをしているんですね」

シンは頷きながら笑つた。その様子にサシヤは違和感を覚える。

何故だろうか、どこか彼の言葉には含みがあるように感じたのだ。

「シンさんはどうしてトートの町へ？」

その問いに彼は一瞬不思議そうな顔をしたが、思い出したかのように答える。

「ああ……トート、トートですね。少し所用で」

サシャは不思議そうに首を傾げる。しかしそれ以上彼は語らなかつたため、彼女は話題を
変えることにした。

シンは初めは口数が少なかつたが、サシャの話し方に心を開き、自身の旅先での出来事や
過去のことを少しずつ語り始めた。サシャもこの村のこと、村での生活のことなどを話し
た。他愛もない会話だったが、サシャにとつてそれはとても楽しい時間だつた。小さな村
なので同年代の子供は少なく、彼女と同じ年頃の人は数えるほどしかいなかった。だから
こうして年の近い青年と話せることが嬉しかったのだ。

それに彼は長く旅をしているようで、サシャの知らない遠い国の話をたくさん聞かせてく
れた。それは彼女の好奇心を大いにくすぐり、時間はあつという間に過ぎていった。

「もうこんな時間ですね」

鳥の飛び立つ音が聞こえ、はっと意識が逸れる。

時計を見たサシヤは驚いたように声を上げた。いつのまにか時刻は夜中を過ぎていたからだ。楽しい時間は過ぎるのが早いというが、本当にその通りだと彼女は思った。

「すみません、こんな時間になってしまつて」

申し訳なさそうに言う彼女にシンは小さく首を振る。

「いえ、楽しかったです」

そう言つて微笑む彼につられてサシヤも笑みを浮かべる。

「ベッドは奥にある部屋のものを使つてください。養父がたまに使っているもので申し訳ないのですが……」

シンは礼を言いながら頷いた。案内した部屋はほとんど寝るために作られたためか、ベッド以外に何も無い殺風景な部屋だ。しかし、教会にあるベッドよりも多少大きいため問題なく眠れるだろう。シンは神父の背丈よりもかなり大きく、こっちのベッドでないと足が飛び出でしまつただろうから。

サシヤはシンが部屋に入ったのを確認すると、自分も就寝しようとして自室へ戻る。

扉を開けようとノブに手をかけたとき、サシヤはシンに言い残したことがあるのを思い出した。

「おやすみなさい。よい夢を」

養父が出かけて数日、口にしていなかった言葉をサシヤは彼に向かって言う。するとシンは少し驚いたように振り返ったが、すぐに微笑んで口を開く。

「ええ、あなたもいい夢を」

サシヤはそれに満足すると、今度こそ自室へと戻ったのだった。

その晩、サシヤは変な夢を見た。

何かが彼女の上に覆いかぶさり、肌を撫せている。自分の体温より幾分冷たいそれは、体の縁を確かめるように肌の上を滑っている。だが、不思議と嫌ではない。むしろ触れられた箇所がじんわりと熱を帯び、気持ちがいいとすら彼女は思った。

そんな彼女の気持ちに応えるかのように、その何かは彼女の身体を弄り始める。胸から腰にかけて優しく撫でていたかと思えば、今度は臍のあたりを指先で擦る。今まで感じたことのない感覚にサシヤは思わず身をよじらせた。しかし、逃げることは許さないと言わん

ばかりに何かが彼女を抑え込む。そしてゆっくりとその何かは彼女の足の間に手を滑らせていく。そしてまだ誰も触れたことのない茂みの奥にある花芽に触れると、彼女はビクリと身体を震わせた。

「んんっ……」

自分でも聞いたことのない甘ったるい声が口から漏れる。恥ずかしさのあまり口を塞ごうとするが、何故か両手は動かない。彼女は困惑しながらも必死に抵抗しようとしたが、やはり身体は動かなかった。

そして再びその何かが彼女の下腹部に手を伸ばすと、今度は秘所の中へと侵入してきたのだ。異物感にサシヤは小さく悲鳴を上げるが、不思議なことに痛みはなかった。むしろもつとしてほしいと思ってしまうほどに気持ちがいいのだ。しかしそれは何かを探るかのようの中で蠢き、ある一点に触れた時のことだった。

「あっ……！」

今までに感じたことのない強い快感にサシヤは思わず声を上げてしまう。だが、やはりその何かに声を聞かれることはなかった。その代わりとでも言うように、その何かは何度も同じ場所を擦り上げる。その度に彼女はビクビクと身体を震わせた。次第に彼女の蜜壺か